

ニホンザル研究の聖地を訪ねて―宮城県金華山・長野県上高地編―

浅見 真生（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

宮崎県串間市都井岬で京都大学の今西錦司らがニホンザル（以下、サル）の観察を行い、同じく宮崎県の幸島で 1948 年にサルの研究を開始してからおよそ 75 年、日本各地でサルの研究が行われてきました。はじめは餌付けによる群れの接近観察が主流で、幸島と大分県高崎山で社会構造や詳細な行動観察・追跡調査が行われました。高崎山にて若き日の伊谷純一郎が餌付け開始前の野生群を追いかけた記録が、講談社学術文庫の「高崎山のサル」にまとまっています。当時、サルの生態が何もわかっていないなかで、地元の方に聞き取り調査をしたり、山でサルの声を聞いて群れを探したり、野帳と鉛筆、双眼鏡だけで山の中に姿をくらす群れを追いかけます。日々の発見と新鮮な感動とともにサルの生態にせまった観察の日々が綴られており、今も続くサル研究のはじまりの姿を知ることのできる名著です。その後、幸島や高崎山での餌付けの成功にあやかり一般の観光客向けに全国で野猿公苑が開設され、サルを間近に見ることのできる場所が増えていきます。一方、餌付けなしで接近観察が可能になった調査地が、鹿児島県の屋久島（1976 年～）と宮崎県の幸島（1982 年～）です。ここでは、島内に分布する群れを長期間追跡調査して研究者が群れに追従することに慣れさせ、隣接して生息する数群の全頭個体を識別することで、純野生ザルの調査が可能となりました。こうしたニホンザルを取り巻く研究の歴史は、杉山幸丸の「日本の霊長類学小史：野生ニホンザル研究を中心に」（霊長類研究、2020）に詳細にまとめられています。そして、近年純野生ニホンザルの研究拠点として熱いのが、長野県上高地です。2022 年 7 月 24 日の NHK「ダーウィンが来た！」にて、サルが生きた魚を捕ま

えて食べる様子が放映されたことでご記憶にある方も多いのではないのでしょうか。

私は学生時代京都大学霊長類研究所に所属しており、学生仲間や先生方から各地のニホンザル研究の情報を聞くたび、いつか全国のサル研究の聖地を巡礼して各地のサルを観察してみたいものだと思っていました（私の研究テーマは哺乳類化石だったので、生きているサル研究の話は異世界でとても興味深かったです）。普段の WMO のお仕事では、里に出てきて被害を出す加害群のサルにばかり接していますが、今年は幸運にも、“サル研究の聖地” 金華山と上高地で純野生のニホンザルを観察する機会に恵まれました。今回の FIELD NOTE では現地の様子をご紹介しますと思います。

＜宮城県石巻市金華山＞

2024 年夏に第 40 回日本霊長類学会大会が仙台で開催され、ポスター発表を行いました。大会公式のエクスカージョン（学会開催地付近で実施される地域見学のようなもの）として金華山ツアーが実施され、現地の研究者に島内を案内してもらいました。まずは仙台から石巻までバスに揺られて移動し、フェリーに乗って金華山島へ渡ります。島に到着すると港付近に黄金山神社という観光地があり、一般の方も来島されます。こちらの神社は、国内では奈良と金華山でしか行われていない神鹿角切行事があることでも有名です。宿泊施設や飲食店も少数あり快適に滞在することが出来るのですが、港周辺の海際にあった民宿などは東日本大震災の津波で流され、廃業してしまったようです。



写真1：金華山のニホンジカ

金華山に到着して最初に出会う動物が、ニホンジカ（以下、シカ）です。金華山は島嶼部におけるシカの生態などの研究も多く、シカ研究の聖地でもあります。神社ではシカに餌をやることができますので、これらのシカも人に慣れておりのんびりと過ごしています。狩猟も行われていないため、森林内のシカも人を怖がらずゆっくりと観察することができました。

エクスカーション参加者の半分は神社周辺のホテルに宿泊し、もう半分は山中の観察小屋に宿泊しました。私は小屋側に滞在しましたが、こちらは港の周辺の整備された観光エリアと雰囲気が異なり、主に研究者の方しか入らない自然に囲まれた山小屋のような空間でした。

荷ほどきをして案内の方について山に入っていくと、すぐに群れに出会うことができました。50 頭程度の群れが頻繁に鳴きながら、林内を移動していきます。林道も何もない急峻な地形を、サルを追いかけて移動するのはなかなか体力を使います。サルを見逃さないように山の中をゼイゼイ歩いていると、いつの間にか後方にもサルが現れ、群れの中に観察者が取り込まれたようになりました。私達と並行して、林内を進むサル達。こちらをチラチラ見ているものの、警戒声をあげたり距離をとったりされることはなく、各々のペースで採食や休憩しながらのんびりと活動しているように見えます。普段は加害個体に威嚇された



写真2：毛づくろいするサル達を観察

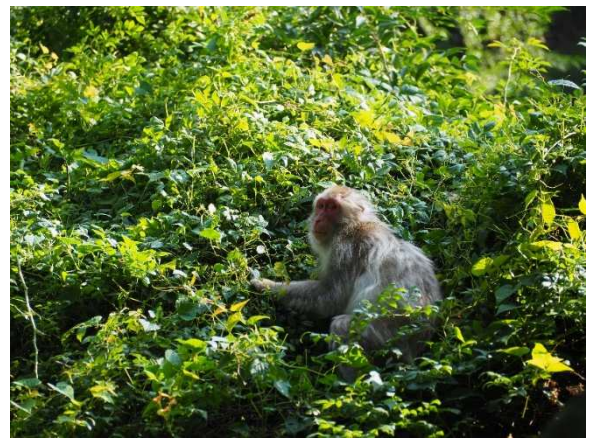


写真3：若葉を食べるサル

り逃げられたりが常の私にとっては、不思議な距離感です。

尾根の上からサルを観察していると、すぐ隣にメスのサルが現れました。私から5mくらいでしょうか、息遣いが聞こえるほどの距離です。静かに観察を続けると、クーコールを始めました。クーコールは群れ内のコンタクトコールで、あるサルが「クー」と鳴くと、仲間のサルが「クー」と返事をする。森で食事をする間、移動する間、サルたちはこの「会話」を繰り返してお互いの位置を確認しつづけています。私の隣で「クー」と鳴いたサルは、唇をちょっと尖らせ口を半開きにして発声していました。クーコールの表情を、肉眼で観察できるなんて、感動です。

観察を終えた帰りがけに、群れと離れた位置でオスサルを見つけました。突然現れた 10 人以上



写真4：クーコールするメス

の人にちょっと戸惑っているように見えます。右手に齧り跡のあるキノコを握りしめ、私たちがその場を去るまで佇んでいました。写真5をよく見ていただくと、キノコを持つ右手の指が1本、ピンと伸びていることが分かります。また、右耳の縁も欠けて切れ込みが入っています。バネ指の耳の欠けたオス個体、こうした外貌の情報を蓄積することで個体識別ができるようになり、長期間観察を続けることで、金華山の群れの親子関係や移出入などの生態が明らかにされてきました。こうした純野生のサルを間近で観察できる拠点は珍しく、数えるほどしかありません。しかし、こうした研究の聖地金華山でも、近年はコロナや震災の影響もあり入山する研究者の数が減り、長年続いてきた個体識別や群れの調査の継続が危ぶまれて



写真5：食べかけのキノコを持つオス

いるようです。ニホンザルに限らず、野生動物の野外調査地の継続問題はどこも頭を悩ませられる問題のようで、日本の野生動物を研究する学生さんが増えたらいいのになと思っています。

<長野県松本市上高地>

2024 年冬、上高地で研究をしている信州大学の学生さんに引率してもらい、厳冬期の上高地へと参りました。厳冬期の最低気温が -25°C にも達する上高地に生息するニホンザルは、非ヒト霊長類で世界最寒地に生息するサルの一つです。標高が高く山の裾にある地形のため、ニホンザルの分布の北限である下北よりも最低気温は低くなるようです。上高地はマイカーの利用が通年禁止されており、冬期はバスやタクシーも入らないため調査地へのアクセスが大変です。今回は、許可を得た大学の車で入らせてもらいました。

上高地の道路を車で走っていると、群れが道の近くに現れました。上高地の群れは、梓川周辺など低標高のエリアを好んで利用しているようで、冬期は特にその傾向が強いようです。車から降りて、休業しているホテルの裏からサルに近づくと、金華山同様こちらのサルも人を気にせず採食や毛づくろいを続けていました。

印象的だったのは、ササや樹皮など採食の時間が長く、食べているサルのお腹がポンポコリンに膨らんでいることです。毛並みの良い密な冬毛で

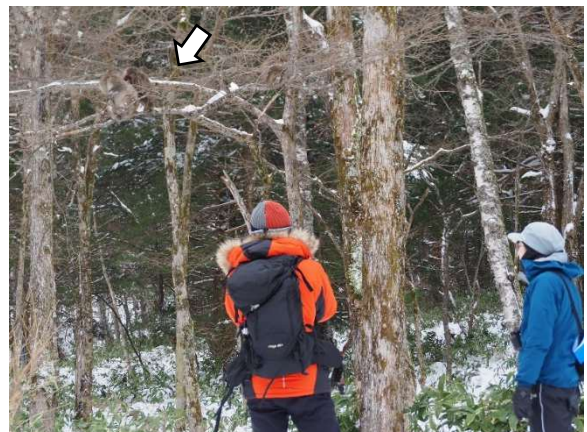


写真6：樹上で毛づくろいするサル達を観察

フカフカしていることを差し引いても、お腹周りの太さが他地域のサルより2周りくらい太い印象でした。上高地の植生ではサルの餌となる液果類が相対的に少なく、繊維質の多い葉や植物を食べ



写真7：ササの葉を食べるサル



写真8：ササの葉の食痕



写真9：樹皮を食べるメス。
発信機首輪を装着している

る割合が多いことで腸内細菌叢が異なっており、さらに冬に備えて脂肪も蓄えることで体格が良くなり、お腹周りも太くなっているようです。

サルが食べたあとのササの葉は、葉の一部が口のサイズに食いちぎられており、虫食い状に歯の縁がボコボコしています。また、上高地はニホンジカの生息密度がとても低いため、林内のササの葉の食痕のほとんどはサルであると考えられます。食痕の残る葉は多く、道路沿いの低標高地でササをよく食べている様子がうかがえました。

上高地でのサル研究は、信州大学に霊長類を研究する松本卓也先生が着任したことや魚食の観察事例もあり、近年盛り上がってきています。発信機を付けた群れの追跡や、個体識別が進んでいるようで、上高地で生息する複数の群れの構成や行動圏が明らかになってきているとのことでした。厳しい環境で生きる純野生群の研究が上高地でも花開き、長く続く調査地になることを期待しています。

今回引率いただいた信州大学の学生さんを含め、上段で紹介した金華山の観察ツアーには学生さんが複数参加していました。学部生や修士・博士の学生さんと野生動物の観察をできたことはとても良い経験でした。何もかもが新鮮な驚きに満ちている学生さん達を見ていると、頭でっかちになって知識ばかりが頭に入っている自分の頭の固さに気づかされます。全ての基礎である、「よく観察して考える」という初心を忘れず、動物に向き合っていきたいと思われました。

参考文献

杉山幸丸 2020:日本の霊長類学小史：野生ニホンザル研究を中心に. 霊長類研究.

伊谷純一郎 1977: 高崎山のサル. 講談社